

# 北 どころ

第67号 2021年10月1日（毎月1日発行）

## 岡田美知代覚書⑤

### 「『蒲団』をめぐる師弟の確執 離婚後に子供を連れて渡米」 原博己

遠い昔、岡田美知代は田山花袋という小説家のお弟子さんでした。花袋は日本の自然主義文学の先駆者でした。小説の代表作は「蒲団」と言いました。ヒロインの名は横山芳子です。芳子のモデルが岡田美知代でした。自然主義文学は、事実をありのまま書くのだと花袋先生は頑固に主張されました。

のペンネームで雑誌「中学世界」に小説「小使い」を発表しています。同年七月、かねて田山花袋の小説「ふるさと」を読んで心酔（晩年、全文を語んじていたと話していました）していた花袋に、入門依頼の手紙を書きました。何度も断られました。書き続けました。同年一〇月二六日付、美知代の熱意が通じて、入門が許されました。

子文壇」に「侮辱」を発表。以上の年譜を礎に、当時の状況を説明します。美知代には、永代静雄という恋人がいたことは前述しました。永代静雄も同志社を中退して、美知代を追って上京します。そして、早稲田大学予科に入學しました。

美知代の生い立ちや経歴について、書いておきます。明治一八年四月一八日、広島県甲奴郡上下町五〇一番屋敷（現在の府中市上下町）に父・岡田胖十郎、母・ミナの長女として生まれました。明治三〇年三月、上下尋常小学校を卒業。同三一年、神戸女学院に入學。

翌三七年二月、神戸女学院を中退して、父胖十郎に伴われて上京。田山家に仮寓し、受験勉強の傍ら花袋から文学を学びます。同年四月、津田英学塾予科（現津田塾大学）に入學しました。

花袋先生は、美知代と静雄の恋を認めませんでした。美知代の父胖十郎が上京し、美知代を郷里の上下町に連れ戻しました。二人は引き離されましたが、二人の心まで引き離すことはできませんでした。やがて、美知代に再上京の機会が訪れ、花袋は美知代を自分の養女としたうえで、永代静雄との結婚を許しました。

美知代には恋人がいました。名前は永代静雄、同志社大学の学生でした。日本キリスト教神戸教会の副牧師だったと

明治三八年五月二日、病気がちのため上下町に帰省。同年五月、「中学世界」に「わが運命」を発表。いったん田山家に戻りますが、翌三九年一月二〇日、上京した父胖十郎と共に上下町へ帰ります。美知代は二一歳でした。同年、雑誌「文章世界」「新生」「文芸倶楽部」などへ精力的に投稿しています。翌四〇年九月には、博文館に「小夜子」の原稿を送っています。

明治四〇年、田山花袋は小説「蒲団」を発表しました。中年の妻子ある文学者、竹中時男が、門弟の若い女性、しかも恋人がいる横山芳子に複雑な恋愛感情を抱くという内容です。ヒロインの芳子は、美知代がモデルです。芳子の恋人の田中秀夫は、永代静雄がモデルです。芳子と秀夫は、作者に意図的に歪曲されて書かれていました。



左より永代静雄、千鶴子、岡田美知代（24歳）  
明治42年ごろ撮影（田山花袋記念文学館蔵）

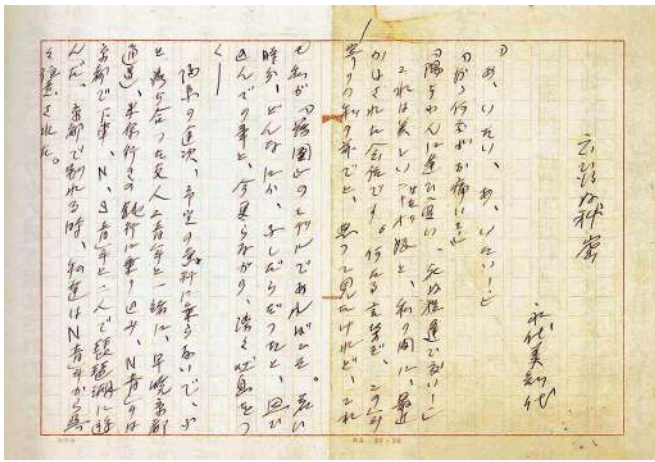
明治四一年三月、再上京して小石川区白山御殿場の兄・実麿宅に同居。同年四月、「女

美知代は怒りました。「先生、あまりにもひどすぎます」と

抗議しました。花袋は、「仕方がないさ、僕の主観だもの」と言ったと、美知代の手記に書いてあります。

美知代は幾たびも手記を書きました。美知代は、花袋を師として、恩は恩として最後まで大切にしています。師を呼び捨てにしたこともありません。しかし、手記では「恩は恩、怨みは怨み」と辛辣です。美知代の苦悩は生涯付きまといつて離れませんでした。

明治四二年三月二〇日、美知代は二四歳で長女、千鶴子を出産。しかし、同年一月、美知代は永代静雄と離婚、千鶴子連れて田山家に戻りま



岡田美知代の晩年の未発表作品「云い得ぬ秘密」(1959年)の原稿

(府中市上下歴史文化資料館蔵)

す。翌四三年一月一七日、千鶴子を文学研究家の太田玉名の養女として入籍。同年四月、妹弟子の水野仙子と共に東京初台に移住。その後、永代静雄と再婚。永代は富山日報の記者になります。スバルに「ある女の手記」、「ホトトギス」に「岡沢の家」を発表。

明治四四年三月五日、長男の太刀雄誕生。同年六月三〇日、千鶴子三歳を待たず二歳で病死。同年七月、永代静雄、美知代夫妻は長男太刀雄を連れて大分県別府の温泉宿に移住。

明治四五年一月、美知代二七歳、永代夫妻、大分より上京。永代静雄、日本週刊新聞の記者となる。大正二年、永代静雄、再び毎夕新聞に入社。大正六年、美知代が永代の戸籍に入籍。それまでは、事実婚だったのです。

大正七年、永代静雄、毎夕新聞社会部長となる。翌八年には、編集局長になるも、同年一月、毎夕新聞社を退職し、新聞研究所を立ち上げます。

大正一二年、美知代三八歳、アメリカの女性作家ストー夫人原著「アングル・トムズ・ケビン」を訳名「奴隷トム」で日本で初の全訳出版。同一年、美知代三九歳、ミュウラック夫人原著「ジョン・ハリファックス」を訳名「愛と真実」で出版。

大正一五年、美知代は永代静雄と離婚。その原因は明らかにされていません。そして、小説「蒲団」以来、積りに積もった鬱屈を突き放すよう

に、一人息子の太刀雄を連れて渡米したのです。

手には「主婦の友社」の特派記者の肩書の名刺。この「主婦の友社特派記者」については、確証がないままでしたが、晩年の美知代からただ一枚だけの名刺を私、原が頂いて保存していました。花袋研究家の小林一郎先生(当時、東洋大学教授)が来庄の折、資料の一つとして進呈しました。現在、群馬県館林市の「田山花袋記念文学館」に所蔵されているそうです。

岡田美知代のアメリカでの生活はどのようなものであったのか、まったく謎のままです。

## 追記..美知代おぼさんの没後

美知代おぼさんから、最初に英語を教わった人は、出井知恵子(旧姓、亀井知恵子、亀井静香氏実姉)さんです。美知代おぼさん没後、知恵子さんは、当時は市役所に勤めていた私を訪ねてくれました。知恵子さんは当時、大阪親愛女学院高校の教師でした。その傍ら、詩と俳句の同人誌『茜』の主催として活躍されていました。

「美知代さんの弟子は二人だけになつたね。頑張ろうね」と、励ましていただきました。それから数年、度々お会いしましたが、私に句集の出版を熱心に勧めてくださりました。

最後にお会いしたのが、庄原グラ

ンドホテルでの会食です。後継者、米田賢一氏が車を運転し大阪から同行。そのとき知恵子さんから、京都を案内したいから上阪しないかとお誘いを受けました。近いうちにと、約束をしていたのですが、知恵子さんの突然の訃報です。

「原さん、知恵子が死にましたでしょう」、電話してくれたのは泰山弘道先生です。亀井家の親戚で、庄原市掛田町のご住職、そして教師でもあった方です。私が中学生の時の担任だった先生です。知恵子さんは、泰山先生をお兄さんと言われていたから、従兄だったのだと思います。

私は目が眩む思いでした。最後にお会いして間がなかったからです。信じられずに知恵子さんの勤め先の学校へ電話して確認しましたが、間違いではありませんでした。

たとえようもなく寂しい。岡田美知代の人と文学を語る人は知恵子さんの他にはいない、と今でも思っています。

私の句集について、大阪で出版ということを知恵子さんが話を進めていただいていたが、中止することにしました。その後、ランドホテルから、出版記念会はどうされますか、と電話があり驚きました。知恵子さんは、出版記念会のことまで手配してくれていたのです。姉のようなお心遣いに、申し訳なく、つらい気持ちになりました。

(今回で連載は終了です)

# 目取真俊『水滴』

## ——まだ「戦後」のまっ最中の沖縄

先の太平洋戦争で唯一国内が戦場となった沖縄では、いまだに日本政府から米軍基地移転をはじめ、戦後処理を押しつけられています。そして戦時下の傷痕も、いまに続いているのです。芥川賞受賞の目取真俊『水滴』(97年刊、文藝春秋)は、沖縄戦で逃げ惑う記憶が自責の念を伴って反復する様を扱った一風変わった短編小説です。

6月の半ば、昼寝から覚めて畑に出ようとした「徳正(とくしやう)」は、右足の膝から下が、腿より太く腫れているのに気付きます。その上、妻の「ウシ」が声をかけてきても、身動きできないだけでなく、声も出ないのです。それだけではなく、足の親指の先が切れて、水が滴り出るので、たちまち奇病と大騒ぎになります。

次の日の夜、徳正の部屋に幻の傷病兵が5人現れ、交代で右足の親指に口を当てその水を飲み、丁寧に頭を下げ消えて行くのでした。やがて、これら兵士たちは一緒の壕にいた者たちだと気づきます。

2週間が過ぎた頃、同郷で師範学校に進み、鉄血勤皇隊員として行動を共にした「石嶺(いしみね)」が現

石嶺を置いて、南への逃避行を始めたのです。「赦(ゆる)してとらせよ、石嶺……」との言葉を残して。一方、徳正の周りでは、うさん臭い従兄弟の「清裕(せいゆう)」が現れ、足からの水を「奇跡の水」としてこっそり商売にします。一合1万円と法

### また読んでみたい本⑥5

青年たちに

音谷 健郎



【文藝春秋版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第65回は、目取真俊の『水滴』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

げたことで、徳正が自分を苛む姿が気がかりです。芥川賞の選考会では、全員一致で同賞に推挙したものの作品の評価には濃淡がありました。「戦後の自己欺瞞を問い直している」(日野啓三)との強い共感から、「またしても沖縄。が、戦争体験は沖縄にとって遺産……」(石原慎太郎)との少し距離をおいた評価まで。

作品を通して思うことは、外地で戦った本土兵士の「友情と自責」と比べて、この沖縄兵の島内での「逃避行」と濃密な「共同体意識」は、どこか違うように思えることです。

今もガマからは、沖縄戦の遺骨が出てきます。中部の辺野古では米軍の代替基地作りの埋め立てが住民の反対を押し切って強行されていますが、それだけではありません。その埋め立ての土取りで、遺骨混じりの土が使われているのではないかと、遺骨収集のボランティア「ガマフヤー」が指摘しているのです。

このように、沖縄戦の戦後処理は今も続いています。日本政府はなぜこうも、日本の南端、沖縄にばかり負担を押しつけるのでしょうか。

今回は、糸山秋子『沖で待つ』を取り上げます。

石嶺は、一緒に逃げる途中、米軍の艦砲射撃に合い破片で腹を割かれたのです。石嶺は同じ村の女子挺身隊の女学生が渡した水筒の水をひとしずく飲んで息絶え絶えとなります。徳正は、その水を一気に飲み干し、

外な値で売って、何百万と荒稼ぎするが、徳正の健康回復と共に、ただの水に戻り、袋だたきに遭います。ただし、このドタバタの顛末には、私は個人的に関心が向かないので、省略します。それよりも、石嶺を壕に残して逃

虫と草木と人びとと ⑤⑤ 中村慎吾

## 「草花の博物誌」

### ヒガンバナ 五十七の別名を持つ「文学」の花

「あつ あれ」

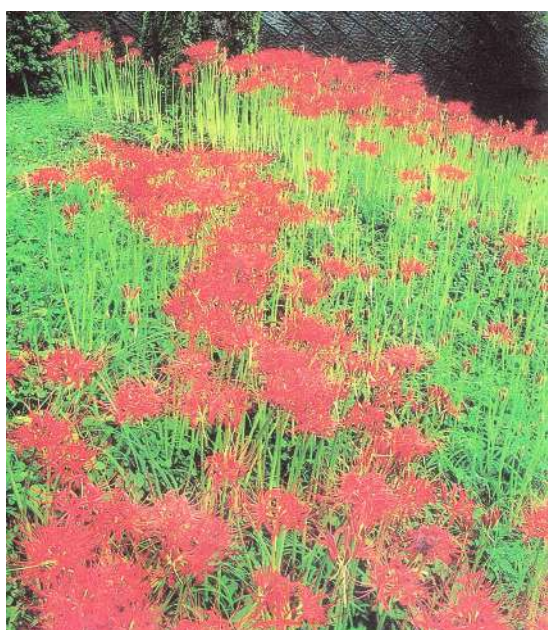
「どこ どこ」

「ひがんばなだ」

い出ていた。

きょう いったら、ひがんばながさいていた。きれいなきれいな花火のようだ。赤ちゃんつぼみもまじって出ていた。いっぱい

これは口和町の竹池谷小学校二年生だった影山光輝君と錦織利成君が、春から観察を続けていたヒガンバナの花を最初に見つけた昭和五十四年九月十九日の絵日記の一節です。秋の彼岸を待つかのように



まっ赤に田んぼのあぜや野原を染めるヒガンバナは、マンジュシヤゲ・カジバナ・キツネノタイマツなど五十七もの別名で呼ばれるほど、人びとの目を引き、

西国の畔曼殊沙華曼殊沙華 森澄雄

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

など、俳句や短歌などに数多くよまれています。影山君と錦織君の絵日記ほど、ヒガンバナの花の鮮やかさと一面に花茎をのばした状況を、うまく表現したものはないと思います。

春、田んぼのあぜや野原にスイセンのように緑色の葉を繁らせていたのに、春を過ぎると葉が枯れ、夏の間はあぜなどから姿を消していたヒガンバナをずっと追っかけていた二人でないと、あのような文章は書けないし、それだけに二人のヒガンバナの花に寄せる思いがこもって

### リュウノウギク 妙薬「竜腦」の香を持つ草花

リュウノウを漢字で書く竜腦、つまり伝説上の動物「竜」の脳という意味です。竜腦は古くから中国やヨーロッパでは頭痛や歯痛などを止める貴重な医薬品として高価で取引

きされていたようで、そのことは十三世紀末、マルコポーロが著した「東方見聞録」にも記されています。竜の脳を見た人はいらないと思いますが、頭痛などを止める貴重で高価な薬品

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

であるところから、さまざまなふしぎな力を持つている竜の脳に、その薬を見たてて名づけられたのかもしれません。

竜脳は、マレー半島やボルネオの熱帯降雨林に自生しているリュウノウジュ（竜脳樹）という樹木に多くふくまれ、その樹木から採取します。竜脳はときには幹のすき間などに白く結晶していることもあるようです。リュウノウジュは高さ六十メートルにもなる巨木で葉にも竜脳をふくんでいるので、もんで香をかぐと、頭がすっきりするようなどてもよい香がするそうです。

リュウノウジュはリュウノウジュ



（写真はいずれも小川光明氏撮影）

とは全く異なるなかまですが、その葉をつんで軽くもみ、その香をかぐと、とてもさわやかなよい香がします。その香はまるで竜脳のようなというところで、リュウノウギク（竜脳菊）と名づけられたようです。

リュウノウギクは草原の草花ではありません。日当りのよい岩場の草花です。岩のわずかな割れ目に根を張り、そこで雨水をたよりにたくましく生き続けています。春や夏、まだ花をつけていなくとも、葉に白いこまやかな綿のような毛がびっしり生えていて、すぐ見分けがつかず、この綿毛は夏の強い日射しをかかわす役目をしているのかも知れません。

秋になり、白い舌

状花と黄色の管状花からなる花をつける頃、葉の綿毛はとれ、緑は一際美しくなり、やがて秋の深まると、ところどころ紅葉し、山はきびしい冬を迎えます。

## 「つれづれ歌談」①⑥

松岡初枝

・夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずい寝にけらしも

岡本天皇（おかもとのすめらみこと）

夜、伴侶を求めて鹿が鳴くが、今夜は相手を得て仲良く寝ているらしい。岡本天皇とは、夫の舒明天皇亡き後、皇極、斉明と重祚した女帝で、天智、天武両帝の母です。万葉集に登上する動物で一番多いのが馬で、次に鹿、猪です。鹿が身近な存在だったのですね。

・高松（たかまど）のこの峯も狭（せ）に笠立ててて盈（み）ち盛り

たる秋の香のよき 作者不詳

高円山を高松と書いたのは、松林があったかららしく、笠を立て



て香り良い松茸が生え、食用にしたのでしよう。茸を詠んだ歌は一首だけ、香りも歌の中にはあまり出て来ません。花も色や形は詠んでも、香りが詠まれるのは後世で、平安、香（こう）を楽しむようになってからの事でしょう。万葉集は質実な時代の歌集で、優雅さとは色あいが異なります。

正岡子規は、俳人、歌人として知られる、若くして逝った天才ですが、写生を重んじ、万葉へ帰れ！古今、新古今はくだらぬ集と言いつつ切っています。

・柿の実のあまきもありぬ柿の実のしづきもありぬしづきぞうまき

正岡子規

快活だった子規は人間好きで、友人や弟子が周りに多くいました。色々な個性と出会うと、あまい柿、しづい柿のような面白さを感じたのでしょうね。人間も食べ物も、口当たりの良いものばかりではないよ。それぞれがあつてこそいいんだよ。

万葉集には天皇から庶民まで、様々な人の歌が載っている。正に子規好みなのでしょう。

本の三方を確認した。天（上部のページ部分）と地（下部のページ部分）にはでっぼっているページはない。親指の腹で撫でたが、違和感はなかった。側面の小口の中央に、ページが少し膨らんだ部分がある。落丁したページの束を接着剤で留めた部分だ。

サンドペーパーで、その部分が平らになるまで擦った。パタパタと本を振って紙の粉をふるい落としてから、親指の腹で撫でるとザラザラしている。目の細かいサンドペーパーに替えて、表面が滑らかになるまでやさしく研磨した。

端のスレや小さな破れなど、傷みが目立つカバーを半透明のグラシン紙で覆い、手ぬぐいをかけて低温アイロンでプレス。そのカバーを本に接着せよれば、ページが抜け落ちてボロボロだった本が、風格ある古書に蘇った。

「うまいもんですね。どこかで修行でもしたんですか？」

作業がひと段落して、男が声をかけてきた。シゲオと名乗っているが、苗字なのか、名前なのかかわからない。半白の薄い髪は老けて見えるが、焼けた顔に皺はなく、意外と若いのかもわからない。

「独学……、いや、我流ですね」

シゲオさんがやって来たのは三日ほど前だ。本を買ってもらえませんかと言って差し出したのが、赤茶けた表紙の薄い小冊子だった。背のホッチキスの針が錆びついて、表紙まで染み出ている。「西田武雄エッチング集」という文字の下に、禿頭で歯の

は小さくない。

「珍しい本ですね。一万円でよければいただきますでしょうか」

ネット販売で、二万円で売れる自信があった。男はハイと小さく頷いた。本の価値を知っているのだろう。「住所がわかる身分証明書が必要ですよ」

困惑した顔で押し黙った。しばらく返事を待っていたが、わたしの方

## エッチング

あきふゆひこ  
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑥1

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

昭和六年だった。

「これはこれは……」

西田武雄は版画家として知られているが、戦前、東京麹町にあった室内社画堂の経営者としての顔も持っている。西田が昭和七年に創刊した

「エッチング」は、戦時下には「日本版画」と改題され、昭和二〇年一月に廃刊になるまで通巻一三二号まで刊行、日本の美術界に果たした役割

が根負けした。

「この本はお預かりするというようにして、五千円だけお貸ししましょうか」

借用証は書いてもらわなかった。住所不定、無職。男の強烈な体臭が物語っている。

「どこかで食事をするところはありますか？」  
「今日は日曜日ですからね」

過疎地の寂れた商店街で、平日でも開いている店の方が少ないのだ。「非常食用のカップ麺なら、いくつか取り置きがありますか？」

「お願いします」  
デカうま大辛味噌ラーメン、あご出汁特性天ぷらうどん、本場台湾大盛ワンタンメン、名前だけは豪華な特売品のカップ麺を、つゆ一滴も残すことなく続けざまに平らげた。空腹が満たされて安心したのか、シゲオさんは重い口を開いて、ポツリポツリと身の上を話し始めた。

シゲオさんは、まだホームレス歴七ヶ月の新米なのだそうだ。師匠と呼んで、あれこれと面倒を見てくれたいたホームレスの先輩がいたのだが、酒に酔って路上に飛び出し、ダンブにはねられた。即死だった。自殺だったのかもしれないとシゲオさんは思っている。

ゴミのような生活をしていて、死んでからもゴミのような扱いを受けて処分される。師匠からもらった青春18きっぷがポケットの中に入っていた。駅のホームのくず箱を漁っていて見つけた。

「おまえはまだ若いから、旅行に出る元気もあるだろうさ」  
四つの印判が押されていて、一回

(一日)分がまだ残っていた。すでに九月に入っていたので、使う機会もないと捨てたのだろう。

今日が九月十日、利用期間の最終日だった。衝動的に、JRの駅に向かっていた。

「人のいない山奥に行こうと思いましたが。大きな木の下で死のうと思いましたが。そうすれば、体が朽ち果ても、その木の養分になる。不用品のゴミではなくなると思ったんです」



食後に淹れたコーヒーを、大事そうに口に含んだ。

「で、死ねなかつたんですね」

シゲオさんが苦笑を浮かべた。「これはという大木を見つけて坐つたんですよ。悟つたように、座禅なんか組んでね。夕暮れ時になって、ガサガサっと大きな音がしたんです。黒いようなものが動いている。熊だと思つて、気づいたら走つて逃げていました。拾つた新聞で、熊に襲われた人の記事を読みましたんでね」

「熊の養分になるのは、嫌だつたんですね」

「お恥ずかしい。そのぐらいの覚悟だつたということです」

西田武雄の本のことを尋ねた。古本屋のワゴンに投げ込んであつた百円均一の本だという。

「作品集の中にある裸婦のクロッキー(素描)が、死んだおふくろに似てましてね」

冊子をめくつて、その裸婦の作品を見た。労働者の体だと思つた。胸は薄く、筋肉質の引き締まつた体形をしている。

「働きの者のお母さんだつたようですね」

シゲオさんは驚いた顔をしたが、

遠い目をして、しみじみと頷いた。

シゲオさんは結局、十日ばかり居候して出て行つた。本の引き取りのときの運搬や在庫本の整理を手伝つてもらつたので、アルバイト代として五万円を奮発した。

「これは饒別です」

そう言つて西田武雄の本を差し出すと、「預かつていてください」と言われた。

「またいつか、取りに来させてもらいます」

照れた笑みを浮かべて一礼すると、店から出て行つた。

シゲオさんが使つていた二階の小部屋の机に、一枚のコピー用紙が置かれていた。

(こんなニヤけた顔をしてるのか……)

わたしが作業しているところを素描したものだった。黒いボールペンで力強く一気に描いた絵は、まるでエッチングの作品のようだった。

「わたしも何か楽しいことを見つけます」

裏にそう書いてあつた。

(もう見つけているじゃないか)

西田の本に出てくる最初の作品は自画像だった。シゲオさんは、その自画像とよく似ているのである。

## まつの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
  - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

### 「一〇三歳になってわかったこと」

篠田桃紅 著 幻冬舎

敬老の日に読んだ本。著者は大正 2 年生まれで、この本を書いたときは 103 歳（今年 3 月 107 歳で逝去）。墨を用いた抽象絵画のアーティストとして、海外でも知名度は高い。

生涯独身で家庭を持たず、どこの美術団体にも所属することなく自由に活動してきた著者が「百歳はこの世の治外法権」、「歳をとるにつれ、自由の範囲は無限に広がったように思います」。「誰か式、誰か風、ではなく、その人にしかできない生き方を自然体という」、唯我独尊だが「運命の前では、いかなる人も無力」と謙虚、悩んでも仕方がないことは考えない。自分はどうだろうかと、内省しながら読了した。



### 「ほんまにオレはアホやるか」

水木しげる 著 講談社文庫

子供の頃から勉強嫌いで、小学校高等科を卒業して大阪の印刷屋に就職、しかしすぐにクビになって職場を転々。徴兵されて戦地に行けば、落第兵として死地に派遣され、爆撃で腕を失い死線をさまよう。生き残ったのが奇跡なので、運が良いのか悪いのかと、ついスリと笑ってしまうのは、著者の生来のユーモアが滲み出ているからだろう。



復員してからの貧乏話がまたおもしろい。世間からアホ扱いされ続けた作者が、鬼太郎で大逆転、しかし本人は、戦時中に会った土人の仲間にならなかったことを後悔している。幸運と不運は、なべると平等なのだろうか。

### 「JR上野駅公園口」

柳美里 著 河出文庫

上野恩賜公園のホームレスの物語。福島県南相馬市の出身。平成天皇と同じ日に生まれた男は、東京オリンピックの前年、出稼ぎのために上野駅に降り立った。家族のために懸命に働いた男を待ち受けていた運命は――。

現在と過去、生者と死者の世界を重層的に描いている。頻りに挿入される通行人の能天気な会話が、男の人生の過酷さを剥き出しにする。「ここに居ない人のことを、ここに居る人に語るのには申し訳ない気がした。居ない人の思い出の重みを、語ることで軽くするのは嫌だった。」、仲間にも心を開かない。秘密を抱きかかえて、男はその日を生き続ける……、なんのために？



## どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば 3 割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入 ⇒ 読了 ⇒ どら紙幣と交換 ⇒ 新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

特別連載①

# 「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

## 序言

「暦」が出来たのは、農耕生活が始まり、農業生産を上げるためであった。それは、農耕が定着する五千年前に、チグリス・ユーフラテス川のメソポタミア地方、いわゆる世界四大文明



(掲載画像参照)の地域で、初めて創られたのである。この「暦」の情報は、いち早く黄河文明発祥地の中国へ伝わり、ヨーロッパにも伝わったはずである。

この「暦」は、夜・昼、規則的ではあるが、形を変えて現れる神秘的な月、この月の満ち欠けを基準にして創られた『太陰暦』と言われるものである。

この『太陰暦』を使っていた古代中国の王たちの悩みは「暦の日付が太陽の位置とは無関係であるところから、暦と春夏秋冬の周期にズレが生じて、農耕などに不便である」ことであった。つまり、このズレ、年により暦上の月日と、実際の季節が一ヶ月も前後にずれることもある。これでは、特に人民にとっては、このズレは大きく、暦通りに種まきをする、それが遅すぎたり、早すぎたりして、作物の生産性に多大な影響を被っていた。

古代の王たちは、いかにして人民

に気候の推移を正しく知らせ、安心して農作業をさせるにはどうしたら良いのか腐心した。この『太陰暦』と季節とのズレをいかにして直すかが考えられていた。その結果、殷代(紀元前一〇二七年頃)から戦国時代(紀元前四〇三〜二二一年頃)にかけて、新しい暦が考案された。

『太陽暦』の手法を取り入れた形の季節の標準、「二十四節気」(一太陽年を二十四等分し、その分割点を含む日に季節を表す名称を付したものを)を暦に書き込むようにしたのである。それで、気候の推移を太陽の推移で示すことが出来るようになった。こうして、中国独自の暦、『太陰太陽暦』が創られた。そして、この暦の編制については時の権力者が掌握していた。皇帝が替るごとに、暦の呼称も変わり進化しつつ、権力者から権力者へと引き継がれた。

わが国で初めて「暦」という言葉が出てくるのは、欽明天皇一四年(五三三年)に百濟(くだら)から「暦」がもたらされる旨のことが「日本書紀」に記されている。このころに暦博士(こよみのはかせ)によって、一般的な「暦」ではなく、国家的な記録作成用として持ち込まれたようである。そして、年が改まることに、

新たな暦が暦博士によって日本にもたらされた。

推古(すいこ)天皇一〇年(六〇二年)に暦博士が、初めて数人の学生(帰化人が多かった)に、時の中国の暦から、日本に合った暦の作成の仕方を伝授した。持統天皇四年(六九〇年)に、初めて日本人の手で成した暦が公式に採用された。中国の宋・齊・梁(四四五〜五〇九年)に採用された「元嘉暦」を日本に合わせたものである。

その後、日本も時の権力者の交代を繰り返すなか、合わせて採用する暦も替り、平安時代初期、貞観(じょうかん)元年(八五九年)に渤海国(中国の東北地方の南東部から朝鮮半島北部にかけて存在した国家)から献上された「宣明(せんみょう)暦」が、貞観三年(八六一年)に正式採用され、以来八〇〇年後の江戸時代まで使われた。貞観元年は清和天皇即位の翌年である。

(著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。機関誌「ふるさと安佐」を毎年出している。今年も「令和三年七月第十二号」発行。希望者には千円(送料込み)で頒布している。事務局〇九〇―九五〇〇―二〇九三)

# どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

野分去る大きな虹の置き土産

近藤 昌平

寂しさの揺るる日もあり赤のまま

富久光

東京へひとり戻る子秋暑し

片岡 正人

曼殊沙華残して草を刈りにけり

隆愚

歯科通ひ粥にうどんに秋なすび

大楨 三代子

バーゲンの傷みし林檎まだ美味しうま

赤川 冬人

アフガンなる邦人救ふ輸送機は

松岡 初枝

重き音して飛び発ち征けり

## 投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「十三夜」

仲秋の名月（旧暦八月十五日）は中国から伝わった風習ですが、日本では、旧暦九月十三日にもう一度「後（のち）の月」と呼んで独自のお月見をしました。今年十月十八日にあたります。

十三夜の頃に収穫される作物にち

なみ、栗や豆を供えて、「栗名月」「豆

名月」とも呼ばれます。十五夜と十

三夜を併せて「二夜（ふたよ）の月」

と呼びならわします。十五夜を眺め

て十三夜を見ないのは、「片見の月」

として忌みきらわれました。

完全な満月ではなく、少し欠けた

十三夜の月を愛でるところが、日本

人の感性なのでしょう。その心を失

わないためにも、伝えていきたい風

習です。



## 「老朽化」

赤川仁洋

八月の大雨で、母屋の台所の地下にある物置が水浸しになった。去年に続いて二回目。倒壊しそうな隣家がようやく撤去されてやれやれと思っていたら、雨風が直接、母屋の壁面に当たるようになった。横殴りの雨だと、隙間から吹き込んでしまう。

足首まである浸水に途方に暮れた。本の在庫に居場所をなくしたガラクタが押し込んである。湿気封じ

に敷き重ねた新聞紙も裏目。取り急ぎ、灯油用の電動ポンプで水をバケツに吸い出して、満杯になったら捨てるという作業を繰り返した。最後は、遺っていた介護用のおむつパットを敷き詰めて水を吸収。カビを防ぐために除湿機をフル稼働したのだが、数日でタンクが満杯になった。

こんな大雨は自分、こないだろうと思っていたら、八月にまた水没。あわてて壁の隙間をモルタルで塞ぎ、再び電動ポンプ、紙おむつで水を除去。これ以上、放置しては土台が腐ってしまうので、ガラクタや濡れた新聞紙の処分も始めている。

去年は店舗部分の雨漏りにも悩まされた。ベランダの花壇の土を独力で除去、雨樋やコンクリの接合部分の目地を業者に修理してもらってどうにか解決した。後継者（子供）がないので、あまりお金はかけたくないのだが、建物の老朽化は止まらない。これからは、身体の高齢化も……。

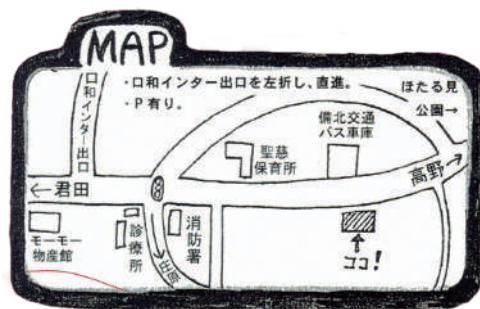
「こんなに本を溜めて、歳を取って動けなくなったらどうするんだ？」

直截に忠告されることもある。

「そのときは店を開放して、タダで本を持って帰ってもらおうさ」

## 第19回 新月マルシェー長月ー

夜空から月が姿を消す新月の日は、月の新たなスタートの日でもあります。神秘的なパワーが宿るとも言われている新月の日に開催する「市場」です。地元の自然の食材を活かした食べ物や、個性豊かな手作り品が多数、出店&出品されています



【開催日時】10月6日(水)10:00～13:00、その次は11月5日(金) 予定

【会場】庄原市口和町大月 三上宅(備北交通上大月車庫向かい)

【主催】口和町「新月マルシェ」の会(0824-87-2754、三上)

## 第1回 広島県北「オーガニックマルシェ」

自然で安全なオーガニック食材にこだわった食品の「市場」です。記念すべき第1回のテーマは、旬の「まこも」。食材としてだけではなく、歴史ある神聖な植物としても知られています。まこもに関連した企画や、野菜栽培農家、手作り食品のお店やさんがたくさん参加しています。

【開催日時】10月10日(日)10:00～13:00

【会場】「敷信村農吉」野菜集荷倉庫(庄原市板橋町1358-1)

【主催】「オーガニック PGS ひろしま」(090-7596-8295、檀上)

## 第21回庄原子どもミュージカル

### 星の王子さま

脚本・指導・演出 / 増田 明

公演 14:30～15:30/ 開場 14:00

入場料 一般・小学生以上 **1,000円** 全席自由 未就学児以下無料

主催：庄原子どもミュージカル実行委員会 お問い合わせ ☎090-2006-6982  
チケット取扱所：

- ジョイフル2F サービスカウンター●庄原市民会館●サングリーンサービスカウンター
- 小池書店●庄原市西城保健福祉総合センター「しあわせ館」●児玉医院(川北町)
- 庄原・三次市内の中国新聞販売所他

※マスク着用とアルコール消毒にご協力ください!

10/24(日)  
三次市民ホール  
きりり

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail: touzin@nifty.com

誌面デザイン: ROUTE183  
協賛: 九日市愛好会

## 編集後記

◇原博己さんの「岡田美知代覚書」は今回で終了です。身近で接した方の貴重な証言で、寄稿していただけたことを感謝します。

◇古川行洋さんの新連載、私も旧暦のことを勉強させていただきました。

◇先月号の紹介「音楽への道」、「卒寿を迎えた元高校の音楽教師」と書きましたが、「傘寿(八十歳)」の間違いでした。訂正すると共に、深くお詫びします。

◇コロナ禍のことはもう書くのもうんざりですが、今度こそ沈静化してきたようですね。イベントの再開も増えています。第六波が来ないことを願っています。芸備線に乗って、秋の紅葉を見に行きたいですね。

第 243 回

# しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 3 年 10 月 9 日 (土) 9:00~13:00

## 庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

## TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

10月8日～10日 10時～15時

第17回絵手紙大賞作品展

★どら書房 →休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休み

但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座 「まかない食堂」中 止

★楽笑座 「うた声喫茶」中 止

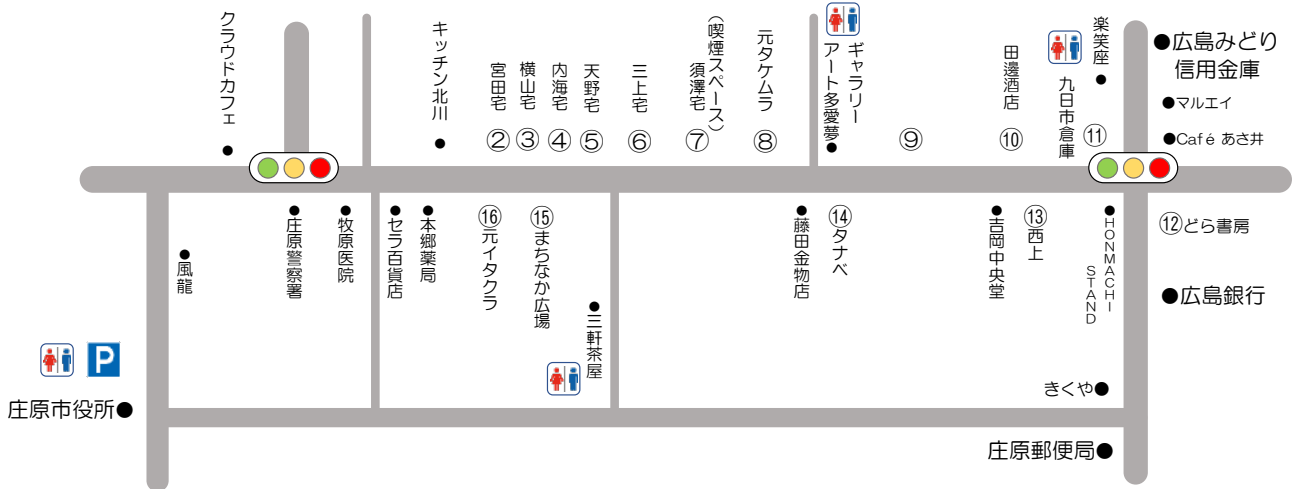
★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍 →九日市スペシャルで餃子200円！

★カフェ・クラウド→タピオカドリンク100円引き  
九日市特製ピタサンド600円

## 出店配置図

※喫煙は喫煙スペースでお願いします



②お休み

③文屋

④お福郷屋

⑤工房アム

ぬくもり  
832gの奇跡  
かぐや姫  
ちくちくはうす玉手箱

⑥和み屋

クラフトショップ  
渡邊農園

⑦農楽会

⑧とらぢ

二八そば加工所  
アーミッシュ  
さだっさ  
健康企画  
ふくふく牧場  
17KITCHEN

⑩克國水産

⑫どら書房

⑬久代水産

くんえん工房 香豚  
吉備路花田 FF

⑭まなべ商事

⑮宮川屋  
田崎屋

⑯どんぐりーず  
片衛商店

出店申込みは、【毎月 20 日締切】 コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽勝座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

